

氏名	山根健太郎
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第5454号
学位授与の日付	平成29年3月24日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 機能再生・再建科学 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	Laminar closure rates in patients with cervical myelopathies treated with either open-door laminoplasty with reattachment of spinous processes and extensor musculature or Hirabayashi open-door laminoplasty: a case-control study (棘突起形成片開き式頸椎椎弓形成術後の椎弓閉鎖の発生率に関する検討 ー従来法との比較)
論文審査委員	教授 木股敬裕 教授 大塚愛二 准教授 西田圭一郎

学位論文内容の要旨

椎弓閉鎖(LC)は片開き式頸椎椎弓形成術後の問題点のひとつあり、頸髄症再発の原因となる。頸椎後湾変形が危険因子として報告されているが、当科では頸椎前湾の減少した症例に対して後湾変形予防のため棘突起形成を併用した術式を施行してきた。同術式と従来の片開き式椎弓形成術についてLCの発生率について比較検討した。

当科で手術を施行した104例を対象とした。術式は棘突起形成片開き式椎弓形成術18例(M群)、従来法86例(H群)であった。術前前弯角とLCの発生頻度、術前後のJOAスコアについて検討した。

M群は全例術前前弯角が10°以下であった。H群は術前前弯角10°以下が21例、11°以上が65例であった。前弯角10°以下での比較ではLC発生症例数はM群：39%、H群：76%で、M群で有意に少なかった。JOAスコア改善率は、群間で有意差を認めなかった。

棘突起形成片開き式椎弓形成術は従来法よりLCの発生を減少させる可能性が示唆された。

論文審査結果の要旨

頸椎症性脊髄症の手術方法としては、日本人が開発した片開き式頸椎椎弓切除術が一般的である。しかし、椎弓再閉鎖や後湾変形などが問題になることがある。申請者は、この点を改善する目的で健側筋群機能を温存する新しい術式を開発し、前述した従来法と術後再発、後湾変形、症状の改善などについて後ろ向きに比較検討した。

結果、新術式において椎弓再閉鎖率が有意に低いこと、後湾変形の可能性が低いことが認められた。症例数が少ないため、症状改善については有意な差は認められなかった。今後の前向き研究が期待されるが、従来法の欠点を補う新しい術式の優位性を示したことになる。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。